

なか酒の座にあっては、たゞ黙って苦笑してゐるより他に術のない自分と知つてゐた私は、さういふ遊びの座に見出す自分のばかりしきさきこちなさがはつきり解つてゐた。第一、角帽をかぶりセルの行燈袴をはいて遊びに行くといふ或るいちぢきなさが嫌だつた。そして、酒がなくても酔ひ、女なくてもよき遊びの座にある趣は、私の頭の裡に湧く詩の心が充分に堪能させて呉れる。私は、私をも誘ひださうとする勇ましい遊蕩者流に、いつも高らかにさう答へた。だから、学校のみならず、同郷の友人達の中に入つても一人私は異邦人だつた。なほさら知らない町の廂のあはひや樹陰が私には楽しかつた。

かうして三十分一時間と歩いてから、私は程よく満ち足りた思ひで柳の下の格子をあけた。そして、先生が酒盃を啣む前で私は蒸菓子を食べた。して、若々しい興奮に快く酔つて終電車に辛うじて間に合つた。

## 十一

先生もこゝろよく私を受入れて下さつた。私を私より高くもなく低くもなく、正しいところに置いて私を見て下さつた。それが何よりも私を安らかに親しました。が、或る時は、やはりふと勿体ないほどに遇して下さると思つて何となく安からず思つて、恥かしく自分を振返ることがあつた。しかし、それも話すうちに仕事の進むうちに忘れ果て、いつもぎり／＼の時刻までは座が起ちにくかつた。

当時もずっと私は北村といふ家にゐたが、ある時、連夜帰りが遅いので、其処の小母さんは私が悪遊びでも始めた案じた

ものか、更けて帰つて見ると、いつもは灯ばかりの部屋に、丁寧にも私の床がとつてあり火鉢に鉄瓶が湯気をたて、ゐたといふ工合だつたので、勘からず苦笑したことがあつた。

## 十二

端午の宵だつた。

寒燈会を浜町で開いた折だつた。私は、みんなから何か流觴居へ持つて行くものを選定する役で、途中、銀座から日本橋と探し歩いた。私の心では牡丹の鉢をと思つてゐたのだが、探し／＼してやうやく日本橋の花屋で見つけたのは、抱へ込むにはあまり貧弱な花だつた。で私は牡丹は断念して鳩居堂へ寄つて筆か何か持つて遅れて行つた。座には同人みんな集つてゐてすでに句作してゐた。

其処へ、車のとまる音がして左衛門先生の元氣のい、声が聞こえたと思ふと、『やあ』といふ笑顔と一緒に左衛門先生が座に入つて来た。その両腕には紅白の牡丹が一鉢づ、抱えられてゐた。私は酷く吃驚した。と同時に、日本橋で見かけた貧弱な花を抱えて来なくてまあよかつたと思つた。

『ははは……、今川小路で見付けて来たんだが、番頭しきりに届けるといつてゐたのを、此奴どうも、先へ来てゐて、後ほど花が参りますなんていふなあ面白くないからね、俵へ乗つたんだが、両方へ抱へると膝が痛くつて……、花が損みやしなかつたかな。』

左衛門先生は、いま薄い包み紙を解いて、眼覚めたやうに灯を浴びて並んだ大輪の花を見ながらこんな風に笑つた。